

問題 1. U, V, W をベクトル空間とし, $U \xrightarrow{f} V \xrightarrow{g} W$ を線形写像とする. このとき, 合成 $g \circ f: U \rightarrow W$ も線形であることを示せ.

問題 2. 次の線形写像 f, g, h について, 与えられた基底に関する表現行列を求めよ. f, g, h は単射か? また全射か?

(1) $f: \mathbf{R}^2 \rightarrow \mathbf{R}^2, f(x, y) = (x - 3y, x + 3y), \mathbf{R}^2$ の基底 $\mathbf{u}_1 = (1, 1), \mathbf{u}_2 = (-2, 1)$

(2) $g: \mathbf{R}^3 \rightarrow \mathbf{R}^3, g(x, y, z) := (2x + 3y - z, x + y, y - z), \mathbf{R}^3$ の基底 $\mathbf{u}_1 = (0, 1, 1), \mathbf{u}_2 = (1, 0, 1), \mathbf{u}_3 = (1, 1, 0)$

(3) $h: \mathbf{R}^2 \rightarrow \mathbf{R}^3, h(x, y) := (x + 2y, 2x + 3y, -x), \mathbf{R}^2$ の基底 $\mathbf{u}_1 = (1, 1), \mathbf{u}_2 = (-1, 1), \mathbf{R}^3$ の基底 $\mathbf{v}_1 = (1, 0, 2), \mathbf{v}_2 = (0, -1, 1), \mathbf{v}_3 = (1, 1, 0)$

問題 3.

(1) ベクトル空間 V に対し, $\text{id}: V \rightarrow V$ を $\text{id}(\mathbf{x}) := \mathbf{x}$ で定め, V の恒等写像とよぶ. id は線形写像であることを示せ.

(2) (教科書 p. 143, 命題 5.7 (2) 参照) $\{\mathbf{u}_i\}_{i=1}^n, \{\mathbf{v}_i\}_{i=1}^n$ がともに V の基底であるとする. $\{\mathbf{u}_i\}_i$ を id の定義域 V の基底, $\{\mathbf{v}_i\}_i$ を値域 V の基底とみなすと (教科書の記号を使えば, $\text{id}: V\{\mathbf{u}_i\}_i \rightarrow V\{\mathbf{v}_i\}_i$ とみなすと), これらに関する id の表現行列は, $\{\mathbf{u}_i\}_i$ から $\{\mathbf{v}_i\}_i$ への基底の変換行列であることを示せ.

補足. ベクトル空間 V, W に基底 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ と $\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_m$ が与えられている状況では, V, W はそれぞれ $h_V(\mathbf{v}_i) := \mathbf{e}_i, h_W(\mathbf{w}_j) := \mathbf{e}_j$ で定義される同型写像 $h_V: V \xrightarrow{\cong} \mathbf{R}^n$ と $h_W: W \xrightarrow{\cong} \mathbf{R}^m$ により $\mathbf{R}^n, \mathbf{R}^m$ と同一視されます. 教科書の 141 ページあたりで「基底を固定して考えるときに $V\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ のように表す」という言い方をしているところです. この同一視のもと, 線形写像 $f: V \rightarrow W$ は線形写像 $g: \mathbf{R}^n \rightarrow \mathbf{R}^m$ に対応します:

$$\begin{array}{ccc} V & \xrightarrow{f} & W \\ h_V \downarrow \cong & & h_W \downarrow \cong \\ \mathbf{R}^n & \xrightarrow{g} & \mathbf{R}^m \end{array} \quad \begin{array}{ccc} \mathbf{v} & \xrightarrow{f} & f(\mathbf{v}) \\ h_V \downarrow & & \downarrow h_W \\ h_V(\mathbf{v}) & \xrightarrow{g} & h_W(f(\mathbf{v})) \end{array}$$

上の行では \mathbf{v} と $f(\mathbf{v})$ が f で対応しています. これらを同型写像 h_V, h_W で下の行にうつしたベクトル $h_V(\mathbf{v})$ と $h_W(f(\mathbf{v}))$ は g によって対応している, つまり $g(h_V(\mathbf{v})) = h_W(f(\mathbf{v}))$ が成り立っているわけです.

このような g は,

$$(f(\mathbf{v}_1) \ \cdots \ f(\mathbf{v}_n)) = (\mathbf{w}_1 \ \cdots \ \mathbf{w}_m)A \tag{*}$$

をみたく $m \times n$ 行列 A を使って $g(\mathbf{u}) := A\mathbf{u}$ と表されます. この行列 A を, 基底 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ と $\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_m$ に関する f の表現行列とよびます.

同じ線形写像 $f: V \rightarrow W$ でも, 表現行列は基底の取り方によって変化します. 例えば $\dim V = \dim W$ の場合, 基底の取り方によっては, 表現行列が対角行列

$$\text{diag}(\lambda_1, \dots, \lambda_n) := \begin{pmatrix} \lambda_1 & & & 0 \\ & \lambda_2 & & \\ & & \ddots & \\ 0 & & & \lambda_n \end{pmatrix}$$

になることもあります. λ はギリシャ文字でラムダと発音します. このような基底 $\mathbf{v}_i, \mathbf{w}_j$ に関しては, (*) より

$$(f(\mathbf{v}_1) \ \cdots \ f(\mathbf{v}_n)) = (\lambda_1 \mathbf{w}_1 \ \cdots \ \lambda_n \mathbf{w}_n), \quad \text{つまり} \quad f(\mathbf{v}_i) = \lambda_i \mathbf{w}_i$$

となります. 基底を「座標軸」だと考えると, f はこの座標軸に関しては座標軸方向のスカラー倍になっている, ということです. このような基底はいつでも存在するわけではありませんが, どのような場合に存在するのか, それはどのようにして見つけることができるのか, というのが残りの講義のテーマです.

問題 2 の (1), (2) は $V = W$ の場合で, 定義域と値域で共通の基底を取る, という意味です. 例えば (1) では $\mathbf{v}_i = \mathbf{w}_i = \mathbf{u}_i$ ($i = 1, 2$) ということです.